

中日接触場面の話題転換 —中国語母語話者に注目して—

楊 虹

要 旨

本研究は、接触場面における中日母語話者の話題転換に違いがあるかどうかを探るため、日本語による初対面の自由会話(20分×14組)をデータに用いて、話題転換のパターンと話題転換ストラテジーという二つの観点から分析を行った。対象者は中国国内で日本語を学ぶ中国人大学生と日本人留学生である。

分析の結果、1.話題転換のパターンでは、日本語母語話者は会話参加者双方の協働的終了プロセスを経てから話題を導入する傾向が見られたが、中国語母語話者は協働的な終了プロセスを経ずに話題を導入するものが6割弱であり、日本語母語話者と異なる傾向が見られた。2.話題転換ストラテジーについては、開始ストラテジーと終了ストラテジーとを分けて分析を行った結果、終了ストラテジーについては、中国語母語話者の使用数は日本語母語話者の6割しかなかった。一方、開始ストラテジーについては、それぞれの使用傾向が異なり、日本語母語話者は相手の理解に配慮する「認識の変化を示す感動詞」の使用が最も多く、中国語母語話者は「言いよどみ表現」の使用が最も多かった。

【キーワード】接触場面、話題転換のパターン、話題転換ストラテジー、協働的、相互行為

1. はじめに

中国人日本語学習者の話し方は「まだ話の途中なのに、いきなり話題を変える」、「話し方が唐突だ」と日本人にマイナスに評価されることがある。その一方で中国人である筆者は日本人の「話を変えてもいいですか」ということばに違和感を覚えることも多い。中日母語話者双方がお互いにこのような違和感を抱き続ければ、円滑なコミュニケーションに支障をきたし、より深い人間関係が築けなくなることも考えられるであろう。

実際に日本語学習者の話題転換に焦点を当てた研究では、学習者の用いる話題転換表現が相手に唐突さを与えると指摘されている(木暮 2002、Nakai 2002)。ただし、これらの研究はいずれも中国語母語話者の学習者を対象とした研究ではない。

中日母語話者による接触場面では、お互いがどのような話題転換をしているのだろうか。そして、お互いに上記のような違和感を抱くのはこの話題転換表現の相違によるものであろうか。それともほかにも要因があるのか。この疑問に答えるべく、本稿は中日接触場面において、中日母語話者それぞれの話題転換を調べ、両者に違いがあるかを探る。

2. 先行研究

2.1 話題転換研究における二つの着眼点

話題転換において、会話参加者がどのような言語・非言語行動をしているかに関して、二つの着眼点からの研究が見られる。一つは相互行為のプロセスの特徴に注目し、話題転換のパターンを分類する研究である。もう一つは会話の参加者がどのようなストラテジーを用いて話題を終了・開始するのかに注目する研究である。

2.1.1 話題転換のパターンの研究

West & Garcia(1988)は話題転換のパターンに着目した研究の先駆けである。彼らは新しい話題が導入されるまでの会話参加者の相互行為に注目した。会話の参加者が相互にまとめや評価表現、相づちのくり返しなどの話題を終了させる活動をした後に、次の話題が導入されるものは、「協働的転換」と分類され、逆にこのような先行話題を相互に終了させる活動が見られず、沈黙等も見られないものは「一方的転換」と分類される。

West & Garcia(1988)では、男女間の初対面会話において、大多数の話題転換は協働的転換であるが、一方的転換はすべて男性によるものという結果が得られ、女性の話の流れが男性の一方的な話題転換に

よって切られるという。話題転換のパターンの分析は会話のスタイルにおける男女間の相違を見出すには有効であると彼らは主張している。

日本語の会話を対象にして、話題転換を相互行為の特徴から分類した研究は村上・熊取谷(1995)である。村上・熊取谷(同)では、「継続型」、「断続型」、「割り込み型」という3つの転換型が見られるという。継続型と断続型はともに先行話題の終結後に後続話題が開始される場合を指すが、断続型には長い沈黙が見られる。この2種のいずれも、前述の「協働的転換」に相当する。「割り込み型」は先行話題についての会話続行中に、会話参加者が急に話順を取り、先行話題に割り込む形で後続話題を開始する場合を指し、「一方的転換」に相当する。ただし、村上・熊取谷(1995)は3者間の会話を扱っており、「割り込み型」で示された例は2者の話題に第3の会話参加者が割り込むもので、当の話題の参加者自らが急に次の話題を開始する例は示されていない。また、村上・熊取谷の研究は量的分析がないため、日本語の会話における話題転換のパターンの傾向は明らかにされていない。

2.1.2 話題転換ストラテジーの研究

もう一つの着眼点は、会話の参加者がどのようなストラテジーを用いて話題を終了・開始するのかに注目する研究である。

日本語の会話における話題転換ストラテジーの研究にメイナード(1993)、前出の村上・熊取谷(1995)、中井(2003)がある。メイナード(同)は日本語の会話に1. 会話中の一時停止(沈黙)、2. まとめや評価を示す表現、3. 限られた反応(相づち、くり返し、笑い)、4. 転換を示唆する文副詞・接続詞等という4種類の転換ストラテジーが見られると報告している。ここにあげられた4種の転換ストラテジーのうち、1~3は主に話題を終了させるための要素で、4は主に話題を開始するための要素と思われる。メイナード(1993)ではこれらを明示的に開始・終了に分けてはいないが、村上・熊取谷(1995)と中井(2003)は、話題転換を開始部と終了部に明示的に分けて分析している。

村上・熊取谷(1995)は話題が変わったことを示す言語的・非言語的行動の特徴を話題転換部における結束性表示行動として捉えており、メイナード(1993)で上げられたもののほか、韻律的特徴の変化や動作の変化も入れているが、笑いについては触れ

ていない。中井(2003)は話題転換部に見られる言語要素のみを分析対象としているが、笑い、沈黙等の非言語行動は触れていない。このように話題転換の役割を果たすものとして、どのような範囲で捉えるかは先行研究によって異なるが、本稿は基本的に話題転換ストラテジーを、話題を終了させる役割を果たすものと話題を開始させる役割を果たすものに分けて分析し、主に言語によるストラテジーに焦点を当てる。

2.2 日本語による接触場面での話題転換研究

日本語学習者の接触場面での話題転換を調べた研究に木暮(2002)と Nakai(2002)がある。この二つの研究はいずれも日本語学習者の話題転換表現の使用頻度を調べたものである。

木暮(2002)は日本国内の日本語学習者(母語未統制)3名ずつを初級、中級、上級の3つのグループに分け、それぞれの話題転換表現の使用状況を調査した。その結果、上級学習者でも話題転換表現の機能を十分に理解しておらず、相手と場面に応じて使い分けできないことが分かった。また、話題転換表現自体は正しいのにどこか不自然な印象を受けるものや、転換表現を使用しなかったため、突然話題が変わったような印象を受けるものも見られた。しかし木暮の研究では、話題の開始部分にのみ注目し、分析は話題導入部分の最初のターンでの発話だけを対象としており、話題の終了についての言及が見られない。

一方、Nakai(2002)は、5人の英語母語話者の日本語学習者(中級)の話題転換表現(topic shift device)を、話題終了部と話題開始部に分けて分析した。その結果、話題開始部では、学習者には間違った接続詞や終助詞の使用が見られた。話題終了部では、日本語母語話者が多様なストラテジーを組み合わせる場面に応じて使い分けしているのと対照的に、学習者は特定の終了ストラテジー(相づち)に偏るため、時には会話に無関心あるいは転換が唐突であるといった印象を与える。Nakai(2002)はこれらの結果から、日本語教育に話題転換表現の指導を積極的に取り入れる必要性を指摘している。

日本語学習者に焦点を当てたこれらの研究は、主に話題転換の言語表現の形式や、使用頻度から学習者の話題転換行動の問題点を指摘しており、会話参加者の相互行為の特徴にはほとんど触れていない。

しかし、2.1.1 で述べたように、会話の参加者の相互行為の特徴に注目した話題転換のパターンの分析は、参加者間の会話のスタイルの相違を浮き彫りにすることができる。接触場面では、木暮(2002)が指摘したような「話題転換表現が正しいのに唐突さを感じる」要因の一つには、学習者が持つ母語話者とは異なる会話のスタイルも考えられよう。そこで、本研究は接触場面における話題転換の特徴およびに学習者の話題転換行動の問題点を明らかにするためには、話題転換ストラテジーの使用頻度の分析のみならず、話題転換のパターンの分析も取り入れる必要があると考える。

3. 目的と調査方法

本稿は中国語母語話者と日本語母語話者の初対面の日本語による二者間会話において、双方の話題転換に違いがあるかどうかを明らかにすることを目的とし、以下の二つの課題を設けて分析する。

課題 1 中日接触場面の話題転換にどのようなパターンが見られるか。

- ① 中国語母語話者の場合
- ② 日本語母語話者の場合

課題 2 中日母語話者の話題転換ストラテジーの使用頻度に違いがあるか。

- ① 話題終了ストラテジーについて
- ② 話題開始ストラテジーについて

なお、初対面の会話を対象に設定したのは、話題転換のされ方は参加者間の関係に影響を受けるが、関係ができていない初対面では、互いの持つストラテジーを用いて会話を運ぶと考えられるからである。

調査対象者は、14名の中国語母語話者(女性)と14名の日本語母語話者(女性)である。中国語母語話者は中国国内の大学で日本語を専攻する3、4年生で、日本語能力試験1級か2級の資格を持つ。被験者全員が2年生になってから週一回以上日本語母語話者と会話の練習をしており、日本人との会話にある程度の慣れはあると思われる。一方日本語母語話者は当該の大学に留学している学生である。

上記中日母語話者で初対面のペア(14組)を組み、20分間の日本語による自由会話を録音・録画した。収録時、調査者は席をはずした。参加者には「日本語で自由に話してください」という指示のみで、話題は指定していない。なお、データ収集の具体的な目的は明かさなかった。

4. 分析の方法

4.1 話題及び話題転換部の認定

会話における話題は内容のまとまりを持つ発話連続を一つの区分として認定した。区分の認定は筆者と協力者(日本語母語話者で、日本語教育関係者)が独立に行い、一致率を算出した。平均一致率は83%であった。一致していなかったところは協力者と協議の上、区分を決定した。

そして、話題転換部は2つの話題の区切れ目にある先行話題の終了部(最初の話題終了ストラテジーを含むターンからその話題の終了まで)と後続話題の開始部(会話の相手が導入された話題を認知し、それについて話し始めるまで)により構成されると考え、そこに焦点を当て分析する。

4.2 課題 1 中日接触場面の話題転換にどのようなパターンが見られるか。

話題転換のパターンの分析は、すなわち話題導入までの相互行為のプロセスの分析である。まずは話題終了部における会話の参加者双方のやり取りの Kategorisierung を行い、次に、話題導入者を中国語母語話者と日本語母語話者に分けて、中、日双方の傾向を比較する。

4.3 課題 2 中日母語話者の話題転換ストラテジーの使用頻度に違いがあるか。

4.3.1 話題転換ストラテジーの分類

本稿は話題転換ストラテジーを終了ストラテジーと開始ストラテジーに分けて分析する。そのため、日本語母語話者同士の話題転換を終結部と開始部に分けて分析した村上・熊取谷(1995: 105)をベースに、これまで複数の研究で話題転換の役割を果たすと指摘されている要素を中心に分析を行う。

4.3.2 話題転換ストラテジーの使用頻度

各話題転換ストラテジーが転換箇所用いられる頻度を明らかにするために、その使用率を算出する。分析手順は下記の通りである。

- ① 話題転換部(終了部+開始部)における中日母語話者双方のストラテジーを抽出し、分類する。話題の終了は参加者二人により成し遂げられると考え、参加者それぞれの終了ストラテジーを抽出する。話題の開始は導入者の開始ストラテジーのみを抽出する。
- ② 参加者一人ずつの各ストラテジーの使用率を

算出する。

終了ストラテジーの使用率=使用数/終了回数

開始ストラテジーの使用率=使用数/導入回数

5. 結果と考察

14組の会話において、全部で177回の話題転換が見られた。話題転換回数は平均12.6/1組で、回

数が最も多いペアは16回で、最も少ないペアは8回である。そのうち、中国語母語話者によるものは100回で、日本語母語話者によるものは77回である。

本研究で見られた転換ストラテジーとそれに対応する主な先行研究を表1に示す。以下、中日母語話者がこれらのストラテジーを、新規話題導入までに用いるかどうか、及びどのように用いるかを述べる。

表1 話題転換ストラテジーの分類

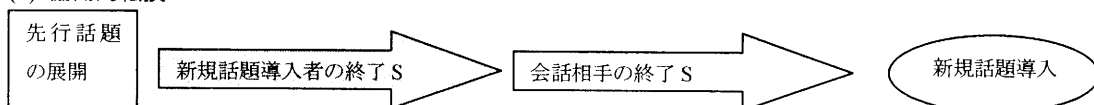
■終了ストラテジー		主な先行研究
相づち	「はい」「うん」「ふうん」などの短い表現。応答として使われるものは含まない	メイナード(1993)、村上・熊取谷(1995)
まとめや評価	話題の内容(自分の話と相手の話両方を含む)をまとめ、評価する発話	メイナード(1993)、村上・熊取谷(1995)、中井(2003)
笑い	はっきりとした呼吸を伴う笑いで、微笑みは含まない	水川(1993)、メイナード(1993)
くり返し	自分または相手の発話の一部または全部をくり返す発話、ただし相手に確認を要求するものは除く	メイナード(1993)、中田(1991)、中井(2003)
■開始ストラテジー		
言いよどみ表現	「あう」「えっと」等会話の展開、内容などを示す手がかりとなる表現	村上・熊取谷(1995)、田窪・金水(1997)、中井(2003)、木暮(2002)
接続表現	「でも」「それで」等先行話題とのつながりを示す表現	佐久間(1990)、メイナード(1993)
認識の変化を示す感動詞	「えっ」、「あつ」等会話の方向性が変わったことを示す感動詞	村上・熊取谷(1995)、田窪・金水(1997)、木暮(2002)
呼びかけ	相手の名前を呼びかけとして用いる場合	村上・熊取谷(1995)、前原(2000)
メタ言語表現	「話は変わるが」等話題として取り上げること示す表現	メイナード(1993)、西條(1996) ¹

5.2 課題1 どのような話題転換のパターンが見られるか

本稿では話題が導入されるまでの会話参加者の

相互行為の特徴から、話題導入のパターンを以下の4つのタイプにまとめた。図1は4つのタイプを図示したものである。

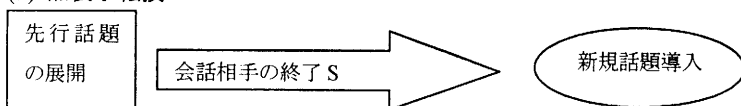
(1) 協働的転換



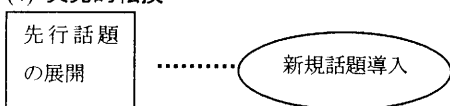
(2) 一方的転換



(3) 無表示転換



(4) 突発的転換



(終了S: 終了ストラテジーの略)

図1 話題導入のパターン

会話例 5 日本の歌手の近況⇒J6 の所属

- 1 J6 きろろはあの上海外国語大学。
2 C6 そうですね。うん、知ってる？
3 J6 見た、見ているわけではないけど。

双方の終了ストラテジーなし

- 4C6 あ、今は〇〇大学の、んー。
5 J6 漢語専修生、え、私ですか。
6 C6 そう。
7 J6 漢語専修生。

以上 4 種類の話題転換のパターンの特徴を見てきたが、中国語母語話者と日本語母語話者それぞれのパターンの生起頻度を見ると、双方とも、協働的転換の占める割合が最も高かった。接触場面における大多数の話題転換は双方の協働により行われた。

水谷(1979)は日本語の会話の特徴を「相手と自分が一緒に会話そのものを作っている」と述べている。話題転換において、日本語母語話者は会話の相手とお互いに相づちやくり返しなどの終了ストラテジーを含む発話をしたり、笑ったりしてお互いの終了意志を表示し合い、その合意を得て初めて次の話題を導入する。日本語母語話者の話題転換の 75% が協働的転換という話題転換のパターンの傾向がこのような会話に対する捉え方の一面を示している。

しかし、中国語母語話者の場合、協働的転換は 42%にとどまっている。22%の話題転換が双方ともなんの終了ストラテジーもないまま中国語母語話者が新たな話題導入を行う「突発的転換」であり、さらに「無表示転換」も入れると、約 5 割の話題は導入者が終了ストラテジーを使用せずに導入している。

自ら話題終了のサインを相手に送り、また、相手からも終了のサインを得てから次の話題を導入するというはっきりとした傾向を見せる日本語母語話者と比べ、中国語母語話者の話題転換のタイプからは、彼らは話題導入前に双方のやり取りで先行話題の終了を明示的に表示・確認することについて、その必要性をあまり感じていない可能性が読み取れる。

このような話題転換は会話の相手に唐突感を与える可能性が非常に高い(会話例 5 と会話例 2)。特に、会話例 5 のような「突発的転換」は話題終了を示す手がかりが全くないため、会話の相手には会話の流れをつかむのが困難となる。その結果、円滑なコミュニケーションが妨げられる可能性が高い。

5.3 課題 2 中日母語話者の話題転換ストラテジーの使用頻度に違いがあるか。

5.3.1 話題終了ストラテジー

中国語母語話者は合計 145 回、日本語母語話者は合計 250 回の終了ストラテジーが見られた。中国語母語話者の使用数は日本語母語話者の 6 割未満であり、日本語母語話者よりはるかに少なかった。すべての終了ストラテジーにおいて、日本語母語話者の使用率が高かった(図 3 参照)。

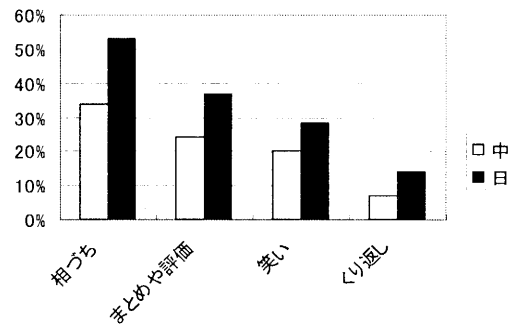


図 3 話題終了ストラテジーの中日比較

中日母語話者の各終了ストラテジーの使用頻度の傾向は類似しており、いずれも「相づち」「まとめや評価」「笑い」「くり返し」へと使用頻度が低くなっていく。これは、会話における参加者間の影響や、同じく日本語を使っているためと考えられる。

しかし、中国語母語話者の使用率は全般にわたり、日本語母語話者より大幅に低い。その理由として、まず中国語母語話者の日本語能力の影響が考えられよう。しかし、「くり返し」以外の 3 種の終了ストラテジーの使用率はともに 2 割を超え、全く使えないわけではない。実際に中国語母語話者の「まとめや評価」に見られる表現を見ると、「大変ですね」「自信を出してください」「本当に面白かったです」「そういう機会があったらよかったなあと思います」「だからとても人気がある」と様々な表現が自然に用いられていることが分かる。また、「相づち」、「くり返し」、「笑い」については、日本語能力の影響が比較的少ないと思われるにもかかわらず、両者の使用率にかなりの差が見られた。終了ストラテジーの使用には日本語力の影響のほか、さらに別の要因が関わっていることが考えられる。

前節では話題転換のパターンについて考察したが、中国語母語話者の話題転換において、終了スト

ラテジーを出さずに行った話題転換が5割にのぼる。「相づち」や「くり返し」、「笑い」は、「話題を前に進める役目を果たさない」(メイナード 1993)もので、会話のペースを落とし、終息へと向かわせる。しかし、中国語母語話者には、会話の相手が終了ストラテジーを含む発話をすれば、自らの終了ストラテジーを用いずに新しい話題を導入するという「無表示転換」も多く見られた。会話のテンポを落とし、お互いの終了ストラテジーで話題を終了させるプロセスを経て導入する日本語母語話者とは異なり、中国語母語話者はすぐ次の話題を導入することができる。即ち相づちやくり返しのような話題をおし進める役目を持たないものは会話を停滞させかねない要素として積極的な使用を避ける、という日本語母語話者とは異なる中国語母語話者独自の会話スタイルの特徴が窺われた。

5.3.2 話題開始ストラテジー

開始ストラテジーの平均使用率については、中日ではそれぞれが使用するストラテジーの傾向が異なる(図4参照)。中国語母語話者は「言いよどみ表現」の使用率が最も高く、ほかの開始ストラテジーの2倍以上である。一方、日本語母語話者の場合、「認識の変化を示す感動詞」の使用率が最も高かった。

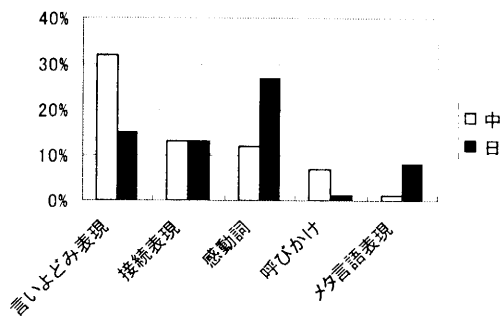


図4 話題開始ストラテジーの中日比較

話題開始ストラテジーでは、中国語母語話者は「んー」、「あのう」、「えっと」のような「言いよどみ表現」の使用率が他を大きく引き離して高く、日本語母語話者の2倍以上となっている。これらの表現は村上・熊取谷(1995)では「働きかけ」に分類され、木暮(2002)では、「えっ」「あっ」等と同様に「談話標識」に分類され、Nakai(2002)の場合、相互作用マーカールに入っている。「言いよどみ表現」

は、場継ぎ的に発話され、聞き手に対して、「有意味な発話にはもうしばらくかかるのでそれまで待機してくれとの指示として利用できる」(田窪・金水 1997)。本稿では、話し手がターンを保ちながら、話題を導入する際に、これから話そうとする内容そのもの又は言語形式を考えていることを示す役割を持つと考える。次の会話例6は中国語母語話者が話題導入をする際に「あのう」が頻出した様子を示している。

会話例6 ラッシュ時の混雑⇒日本に旅行

- 1J9 だからすごい。ラッシュの時間はものすごく混む。だからこう人が入らなかつたら駅員さんがぎゅっと押し込むという。
 2C9 [笑い]ここもその、そうするところがある。
 3J9 押し屋、押し屋という職業。
 4C9 押し屋？
 5J9 押し屋[手で押す動きをする]、押し屋。
 [二人笑] 押し屋。
 (4)
 →6C9 んー、じゃー、(C9が笑、J9も笑い返す)
 (4)
 7C9 んー、んー、あのう、んー、日本、あの私の友達は、今日本にいる。大学に。
 8J9 うん。
 9C9 彼の話によると、あのう、日本という石川県、あのう、あのう、あのうとても、んー、とても美しい。
 10J9 うん。
 11C9 美しい。旅行、旅行に、んー、旅行のために日本へ行くと、どこがいいと思う？
 12J9 うん、そうだな。こう、歴史的なものを見たい人はやっぱり京都とか。

会話例6では、日本のラッシュ時の混雑についての話題が終了した後、C9は6C9で言いよどみ表現「んー」と接続表現「じゃー」で新規話題の導入を試みた。しかし、6C9では次の発話が出てこなかったため、C9は笑いで発言を回避し³、ターンをJ9に譲ろうとした。しかしJ9がターンを取らなかったため、C9は再び話題導入を試みた。6C9～11C9に渡る長い導入部では「んー」や「あのう」が多く見られた⁴。話題を探し、さらに適切な日本語を探しながらC9が懸命に新しい話題を導入している様子が見られた。

中国語母語話者にとって、目標言語である日本語による話題導入には発話内容と言語形式の両方に処理の負荷がかかり、日本語母語話者より高いハードルを感じるだろう。にもかかわらず、本研究では

中国語母語話者の話題導入数が日本語母語話者より3割多かった。話題開始ストラテジーのうち、「言いよみ表現」が他を大きく引き離して高かったことは、中国語母語話者が会話の停滞を避けるため積極的に話題を導入しているという姿勢と、日本語による話題導入の難しさのせめぎあいを反映したものと考えられる。

一方、日本語母語話者の場合、「えっ」「あっ」などの「認識の変化を示す感動詞」が最も多く見られた。これは村上・熊取谷(1995)では認識の変化を示す言葉と分類され、木暮(2002)では、「談話標識」に分類されている。これらの言葉の2次的な働きとして、相手に話の内容の方向性を察知する手がかりを与える(田窪・金水 1997)。つまり、自らの発話の内容が先行発話との関連性が低いまたは直接関連がないことを聞き手に示し、聞き手の注意を喚起するなどの役割を果たす。日本語母語話者は「認識の変化を示す感動詞」を用い、間接的に話の関連性を示すことにより聞き手への配慮を示すという特徴が見られた。

6. まとめと今後の課題

本稿は中日接触場面の話題転換を、話題転換のパターンと話題転換ストラテジーという二つの観点から分析し、中国語母語話者の日本語母語話者とは異なる話題転換の特徴を浮き彫りにした。

まず、話題転換のパターンにおいては、中国語母語話者には日本語母語話者と異なる傾向が見られた。日本語母語話者は双方の終了合意の後に話題導入をするパターンが多数を占めるが、中国語母語話者には話題の終了を明示的に表示しないで導入を行う場合も多く見られ、それが日本語母語話者にとっては唐突な話題転換と感じ、困惑する一因となっていることが示唆された。また、中国語母語話者が話題終了ストラテジーを用いないため、日本語母語話者は会話の継続を優先し、相手からの終了ストラテジーが得られない場合でも次の話題を導入する場合もある。接触場面において、日本語母語話者は自らの会話スタイルを保ちながら相手に合わせて柔軟に調整を行っていることが窺われた。

本研究は、このような相互行為の特徴に焦点をあてた話題転換のパターンの分析によって、話題転換ストラテジーの頻度のみの分析では見落とされかねない問題点を明らかにすることができた。日本語教育

における談話ストラテジーの教育は、相互行為の視点を取り入れ、談話レベルで行うことの必要性が示唆された。また、その際、日本語教師が学習者の持つ独自の会話のスタイルを踏まえた上で談話ストラテジーの教育を行うことも重要であろう。

次に、話題転換ストラテジーの使用頻度において、終了ストラテジーでは、中国語母語話者の使用率の低さが目を引く。この背景として、終了の合図をそれほど示さなくても、次の話題を導入することに抵抗感がないという中国語母語話者の会話のスタイルの影響が推測される。開始ストラテジーでは、中国語母語話者の「言いよみ表現」の使用率の高さから、その話題開始ストラテジーの使用における日本語能力の影響が示唆された。

西條(1998)では、中上級学習者が相手の発話を理解できないために急な話題転換を行うという問題点も指摘し、接触場面における「メタ言語的方略」の有用性を検証した。本研究では、中国語母語話者によるメタ言語表現はほとんど見られなかった。メタ言語表現の使用には中国語母語話者の日本語能力による影響が考えられるが、今後はその分析も行いたいと考える。

なお本研究は接触場面の会話を分析資料としたが、今後は母語話者同士の会話資料も入れて接触場面と母語話者同士場面の比較分析が求められる。また、話題転換の多くの場面に沈黙が関わったことから、今後沈黙の分析も含み、非言語行動の分析を試みたいと思う。

謝辞 本研究をまとめるにあたり、佐々木泰子先生に多くのご助言を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

注

1. 西條(1996)では、メタ言語表現のなかに、本稿ではまとめ表現と捉える「総括」発話も含む。
2. 本稿では、ターンを基本単位に文字化資料を作成しているが、話題の終了部と開始部を明示するために、同じターンに終了発話と開始発話を含む場合、それを分けて番号を振って示している。なお、文字化規則は以下の通りである。
() : 中の数字は沈黙の長さを示す。1は1秒である。
[] : 中の説明は非言語行動を示す。
* : *で囲うものは小さい声での発話を示す。
○ : 固有名詞で、被験者のプライベートに関わるものまたは発話を示す。

- ローマ字：中国語の発音記号で、中国語による発話を示す。後ろの () は日本語訳を示す。
3. 早川(2000)は笑いの分類をし、うまく言語化できないとき、とりあえず笑うことがあると指摘している。
 4. この話題開始部に言いよどみ表現が用いられたという立場で複数回見られたものでも一回とカウントした。

参考文献

- 木暮律子 (2002) 「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』5, 5-23.
- 西條美紀 (1996) 「テレビ討論における話題転換にメタ言語が果たす役割」『表現研究』63, 30-37.
- 西條美紀 (1998) 「接触場面におけるメタ言語的方略の有用性—発話理解の問題を解決する学習者方略についての実証的研究—」『世界の日本語教育』8, 99-119.
- 佐久間まゆみ (1990) 「接統表現の機能と分類」『日本シンポジウム「言語理論と日本語教育の相互活性化」』16-25.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動しの談話的機能」『文法と音声』くろしお出版 257-278.
- 中井陽子 (2003) 「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16, 71-95.

- 中田智子 (1991) 「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10(10), 52-62.
- 早川治子 (2000) 「相互行為としての「笑い」—自・他の領域に注目して—」『文学部紀要』文教大学文学部第14(1), 23-43.
- 前原かおる (2000) 「呼びかけの特徴—題目との接近可能性」『広島大学日本語教育学科紀要』10, 57-64.
- 水川喜文 (1993) 「自然言語におけるトピック転換と笑い」『ソシオロギス』17, 79-91.
- 水谷修 (1979) 『話しことばと日本人—日本語の生態』創拓社
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62, 101-111.
- メイナード K. 泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 楊虹 (2004) 「中日接触場面における話題転換」(未公刊) お茶の水女子大学人間文化研究科言語文化専攻 平成16年度修士論文
- Nakai, Y. (2002) Topic Shifting Devices Used By Supporting Participants in Native/Native and Native/Non-native Japanese Conversations. *Japanese Language and Literature* 36, 1-26.
- West, C. & Garcia, A. (1988) Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men. *Social Problems* 35, 551-573.

やん ほん／お茶の水女子大学大学院 応用日本語論講座
ttn82rd23y@mx8.ttcn.nc.jp

Topic Shifting in the Chinese and Japanese Native Speakers Contact Situation — Focused upon Chinese Native Speakers —

YANG Hong

Abstract

The aim of this paper is to specify differences in the way of topic shifting by Chinese and Japanese participants in the Japanese contact situation. The data consist of fourteen 20-minute dyadic Japanese conversations recorded and videotaped in China. The analysis focused upon topic shifting patterns and topic shifting strategies. The results show that about topic shifting patterns, Japanese participants explicitly conduct topic closing between them collaboratively. On the other hand, Chinese participants tend to initiate a new topic without clearly demonstrating closing the previous topic. As to topic shifting strategies, Chinese participants use much less strategies in topic closing, compared to Japanese participants. Moreover, Chinese participants and Japanese participants show different tendencies in most frequently used topic opening strategies. Chinese participants initiate topics by utilizing fillers, while Japanese participants do so by using discourse markers that show their understanding of their counterparts.

【Keywords】 contact situation, topic shifting patterns, topic shifting strategies, collaborative, interaction

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)